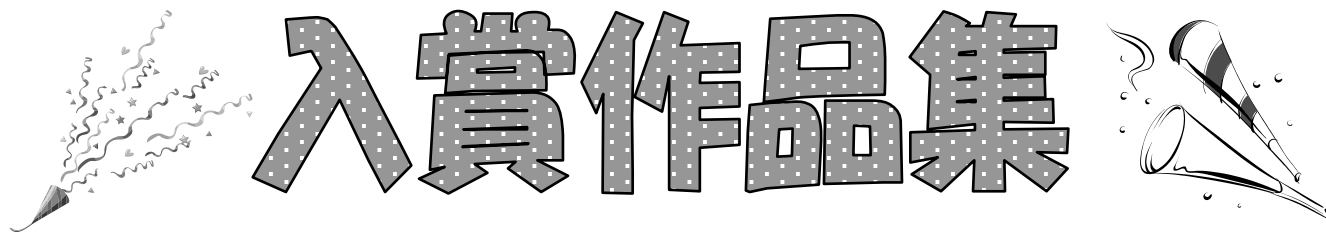




第37回 中区明るい選挙推進作文コンクール



第37回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に290作品、小学生B部門(4～6年生)に707作品、中学生部門に192作品、合計1,189作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区长により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「おめでとう中区90歳! わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「おめでとう中区90歳! より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「～中区100周年構想 10年後の中区のために～ 選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/service/living/election/meisui/>



目次

― 小学生A部門（一～三年生） ―

・ 中区長賞（金賞）	何ど食べてもおいしい豆大福	北方小学校	三年	橋本 奈乃羽	… 1
・ 銀賞	ひみつのばしょ	間門小学校	一年	岡崎 航士	… 2
	ぼくの家の近くの地区センター	立野小学校	二年	三崎 創太	… 3
・ 銅賞	ラジオ体そう	山元小学校	二年	村上 ゆりあ	… 4
	大すきな中図書館	大鳥小学校	三年	柳沼 小百合	… 5
	私の大好きな山ちよう公園	間門小学校	三年	千葉 理瑚	… 6

― 小学生B部門（四～六年生） ―

・ 中区選挙管理委員会委員長賞（金賞）	今わたしたちに出来ること	大鳥小学校	四年	佐々木 陽向	… 7
・ 銀賞	中区をより良い町にするために私がやる三つのこと	間門小学校	四年	坂部 綾香	… 8
	スポーツでつながる	北方小学校	六年	柘田 優風	… 9
・ 銅賞	人と人とのつながり	北方小学校	五年	成迫 颯	… 10
	中区九十歳！あいさつとマナーで暮らそう	北方小学校	六年	竹田 汐里	… 11
	手と手をつないでできること	本町小学校	六年	矢野 詩織	… 12

― 中学生部門 ―

・ 中区明るい選挙推進協議会会長賞（金賞）	選挙への一歩	仲尾台中学校	二年	渡邊 滉太	… 13
・ 銀賞	私たちがつくる町	本牧中学校	二年	太田 更咲	… 14
	落選が教えてくれたこと	仲尾台中学校	三年	小林 千紗	… 15
・ 銅賞	中区の将来の為に大切な選挙	仲尾台中学校	一年	廣井 まなみ	… 16
	選挙と向きあって	大鳥中学校	三年	川島 凜佳	… 17
	気持ちでかわる一票の重み	本牧中学校	三年	廣田 伶	… 18

小学生A部門

☆☆☆ 中区長賞（金賞） ☆☆☆

「何ぞ食べてもおいしい豆大福」



北方小学校 三年 橋本 奈乃羽

わたしのまちのすきなところは、おかめという、食どころです。わたしは、ここで売っている、豆大福が大好きです。

おかめは、山元町の商店がいのの中に、あります。そうぎょう五十九年で、佐川さんという、おじさんとおばさんが、二人で、毎日やっています。

山元町は、四十四年前にはいしされた、市電長者町線の終点でした。市電が走ったところは、のりおりする多くの人が、山元町商店がいで、買い物をしていたそうです。市電がはいしされ、バスにかわってから、商店がいの人通りも少なくなってお店がへっていききましたが、おかめは、今もむかしもかわらず、えいぎようしています。

おかめのとびらを開くと、おじさんとおばさんの「いらっしやい。」という声と、ざいりようのまじったにおい（おもち、あんこ、しょうゆのにおいなど）が、わたしをむかえてくれます。いつもぜったい買う物は、豆大福ですが、ほかにもおいしい物が、いっぱいあります。食どころのメニューのオムライスや、ラーメンもおじさんの手作りでおいしいです。豆大福は、おじさんとおばさんが、毎朝三時くらいにおきて作っているそうです。お店は朝の七時からやっていますがお昼くらいには、豆大福は、売りきれてしまうので、わたしも、お母さんと、いつも早く買いに行きます。

さんねんな事に、おかめには、あとつぎがないそうです。それから、おかめの豆大福は、おじさんにしか作れない味なので、おじさんとおばさんには、いつまでも元気で、お店をつづけてほしいです。

わたしのすきな、おかめの豆大福の作文を書いていたら、また食べたくなってしまいました。またこんど、お母さんと買いに行きたいです。

〈講評〉

中区にまだ市電が走っていた昭和の頃の本牧のまちの原風景がしっかりと描かれていることや大好きなお店に入った途端、まさにあまーい匂いが鼻にまとわりつき、店主のおじさんやおばさんの「いらっしやい」という声とともに温かさに包まれる情景が本当にその場にいるように錯覚してしまう描写力が本当に素晴らしいです。また、中区という都会のまちにおいても、このように素敵な昔ながらのお店がいつまでも続いているほしいものだと、いろいろなことを考えさせられる作品でもありました。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「ひみつのばしょ」

間門小学校 一年 岡崎 航士

ぼくは、「むし」がだいすきです。

あたまのなかは、いつもむしのことばいっばいです。むしのことをかんがえたり、えをかいたりするのがたのしいです。

でも、おかあさんは、「いつも、むしのことばかりかんがえて！コウシむし！」
とって、おこります。それでも、ぼくは、むしがだいすきです。

ぼくには、ひみつのばしょがあります。ぼくのだいすきなばしょです。がっこう
がやすみのひは、いつもそこへいきます。いつもおこってばかりいるおかあさんも、
いっしょにいきます。

ひみつのばしょなので、あまりおしえたくないけど、すこしだけおしえます。

そのばしょは、ほんもくしみんこうえんのなかにある、トンボいけです。トンボ
いけには、ちいさなたんぼがあります。たうえやいねかりたいけんができます。チ
ョウやバツタ、トンボをつかまえることができます。なかでもぼくが、いちばんす
きなのは、カマキリをみつけることです。トンボいけのまわりのくさむらには、カ
マキリがたくさんいます。カマキリがいるこうえんは、すくないので、ぼくにとっ
て、ひみつのばしょなのです。

ぼくは、つかまえたむしは、かならずもとのくさむらにかえます。なぜかとい
うと、こうえんのしぜんをまもるためです。

もし、ぼくのひみつのばしょにいったら、おなじようにむしは、くさむらにかえ
してください。おねがいます。

もうすぐ、トンボとりだいさくせんがあります。みんなで、トンボをつかまえま
す。つかまえたトンボのはねに、きこうとすうじをかきます。どこから、どこまで
いどうしたかしらべるためです。オオシオカラトンボ、ウスバキトンボにギンヤン
マ。いまからとてもたのしみです。

〈講評〉

自分のとっておきの場所を紹介するという書き方が子どもらしく、虫が大好きな思
いと同時に、虫に対する優しさが全面的に表れている作文です。お母さんと一緒に虫
取りに行き、虫を熱心に探している姿が目につかびます。最近では虫取りをする子ども
が少なくなってきたように感じますが、「ひみつのばしょ」のような公園に出かけて
みることで、新たな発見があるかもしれないですね。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「ぼくの家の近くの地区センター」

立野小学校 二年 三崎 創太

ぼくの家の近くには、竹の丸地区センターがあります。ここは、地いきのみなさんが、べん強、スポーツ、音楽のれんしゅうやおりょうりなどいろいろなことができます。赤ちゃんからお年よりまで、だれもが気がるにりようできます。

ぼくの家ぞくは、一年前に中区へ引っこしてきました。近じよのこともよくわかりません。夏休みが明けて、新しい小学校にとう校するまで、友だちもまだいません。なんだか心細くて、ふあんでいっばいでした。

そんなとき、はじめて竹の丸地区センターに行きました。

「こんにちは。」

つてスタッフさんが声をかけてくれました。

「こんにちは。」

つてぼくもあいさつしました。

「ここに、丸じるしをつけてね。」

スタッフさんは、りようほうほうをやさしく教えてくれました。知らないことだらけのぼくに、声をかけてくれる人がいて、とつてもうれしかったです。

その日から、ぼくは、よく図書コーナーで本を読んだり、しようぎやオセロをかりてあそぶようになりました。体いくしつでは、たつきゅう、バトミントンやバスケットボールもできます。むりようであそべて、ラケットやボールもかしてくれます。新しくできた友だちやお兄ちゃんたちといっしよに、あせをながすのはとても気もちがいいです。はじめて会った人と、いっしよにプレーすることもあります。

竹の丸地区センターは、なかまをつくつたり、あいさつや人とのふれあいをとおして、いきいきとしたえがおが生まれるところです。みんなにおすすめて、みんなも、えがおになってくれたらうれしいです。ぼくも、あいさつや、いっしよに楽しむことで、だれかの元氣やえがおにつなげられるようになりたいです。

〈講評〉

地区センターでの何気ない会話のやり取りが、自分に元氣を与えてくれたことを表した素直な作文です。引っ越し当時の不安な気持ちたちが徐々に和らいでいく様子がよく伝わります。地区センターは、様々な人たちが自分たちの趣味に取り組んだり、憩いの場として利用したりすることで、老若男女問わずともに居合やすことのできる貴重な場です。そこでの出会いやつながりを大事にし、地域の輪を広げていけば誰もが住みやすい町になることでしょう。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「ラジオ体そう」

山元小学校 二年 村上 ゆりあ

わたしは、なつ休みに、ラジオ体そうにいきはじめました。いつもハンコをくれるおばさんがいました。名前はにしおさんです。

だんだん話をするようになっていつのまにかなかよくなりました。「雨がふつてもやりがふつてもくるよ。」とお兄ちゃんがいったら、にしおさんが「わたしも。」といっていました。雨の日にいつてみたらやっぱりました。いつもは30人ぐらいるけど雨がふつてるときは6人でやっていました。にしおさんはおなじちようないではなくてすこしとおいところからきているそうです。雨の日でもわたしたちといっしょにかえられるようにとわざわざとおまわりしてかえってくれました。にしおさんと話してかえるのはとてもたのしかったです。「あしたは、おかしもらえるかもよ。」とかがいこくの話をうしえてくれました。

あるときは、「子どもたちはたべないかもしれないけどこれにわになったからたべてね。」とミョウガをくれました。おかあさんはよろこんでいました。わたしもたべてみたらやっぱりにがかったです。でもにしおさんがくれたのはうれしかったです。つぎの日はおかあさんはおれいにそうめんをあげました。そのときおかあさんとにしおさんは、はじめてあいました。にしおさんとおかあさんが会ったときにふしぎにおもいました。そしてともだちになったことをうれしくおもいました。わたしの町は、おもってもないところであたらしいであいがあつてそのわが広がつていくようなすてきな町です。

〈講評〉

ラジオ体そうという何気ない行事の中で、貴重な人とのつながりを得たのですね。自分だけでなく、お兄さんもお母さんも仲良くなれたことは、にしおさんにとってもきっと嬉しかったことでしょう。もらったミョウガが苦いけれど嬉しかったこと、お母さんとしおさんのつながりを友達と表現することなど、子どもらしい素直な表現に好感がもてます。偶然の出会いではありますが、ぜひそのつながりを大切にしてくださいと思います。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「大すきな中図書館」

大鳥小学校 三年 柳沼 小百合

わたしが一番すきな場所は中図書館です。中図書館のたくさんの本の中からお気に入りの本をえらぶ時とてもわくわくします。すきな作しやの所に行つて、「まだ読んでない本あるかなー」とか、新かんのしょうかいコーナーを見て、「あ、この本読んでみたい。さがしてみよう。」と思つて図書館の中を歩き回ります。おもしろそうな本を見つけると家に帰るまでまちきれないので、図書館のソファアにすわつて読んでしまいます。それに一ど読んだ事のある本でも図書館のいすにすわつて読むと家で読んだ時とはちがうかんじがします。図書館のてんじょうは高いし、たくさん本にかこまれているとなんだかホットします。

それに前からカウンターのお仕事つて楽しそうだなあと思つていました。だから2年生の夏休みに図書館のお仕事体けんにおうぼしました。バーコードをピツとした時、本当の図書館の人みたいになつた気がしました。たくさんかりてくれるとたくさんピツとできてとても楽しかつたです。

わたしが本をたくさん読むようになったのは1年生の夏休みの宿題に読書カードという物があつて夏休みの間に5さつ読みましようと言われたのですが、わたしは6さつ読む事ができました。先生が「すごいね。」と言つてくれてとてもうれしかつたです。1さつ読むと同じシリーズのほかの本も読みたいなと思うし、本を読むとドキドキしたりふしぎに思つたりする事がたくさんあつて、つい時間をわすれずつと読んでしまいます。

2年生は1年生の時よりもつとたくさん読もうと思ひました。ドラえもんの読書ノートを買つて1さつ全部記入すると50さつ読む事になるのでわたしは6さつ買つて2年生の1年間の間に300さつ読む事を目ひようにしました。2年生の冬休みが終つた時、目ひようをたつせいすることができました。

わたしのような本がすきな人が中図書館にはたくさん来ています。きっとその人たちも本が大すきでこの図書館が大すきなんだろうなと思ひます。図書館が家の近くにあつてよかつたです。これからも中図書館にたくさん通ひたいです。

〈講評〉

本を読むことに対する思いが全面に表れていて、読んでいる方もつい図書館に行つてみたいと思えるような作文です。図書館での仕事体験に応募してバーコードを打つたこと、読書ノートを利用して年間三百冊以上の本を読んだことなど、具体的なエピソードが書かれています。本が好きなのだなという思いが伝わります。きっとこれからもたくさん本と出合い、情操豊かに育つていくことでしょう。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「私の大好きな山ちよう公園」

間門小学校 三年 千葉 理瑚

私のすんでいる町には、とても広くて大きい公園があります。そこは山ちよう公園です。

晴れた日には、ほぼ毎日、お母さんと私とあい犬のリリー、三人でさんぽに行っています。

その日学校であつた事を話したり、うん動会の前にはリレーのれん習をしたりできるので、この公園が大好きです。

この公園には、私の好きな遊具もあります。一つは、どこにでもあるシーソーです。もう一つは、ここでしか見た事がないとくべつな遊具です。とてもかわつた遊具で名前は分かりませんが、バネの上に四角いたがのつていて、手すりがついている遊具です。このグラグラ動く遊具の上でおどったり、はねたり、バランスをとつて、リリーといっしょに遊ぶのがとても好きです。

ほかには、うん動会のリレーのれん習をする小さい丘があります。下から全そく力で上に登るれん習をする所で、お母さんが考え出してくれました。足が速いリリーをおいかけながらするれん習ほうほうです。速くていつもおいこせないのので、いつかおいこせるようにこの丘でれん習をつづけたいです。

私のあい犬のリリーもこの公園が大好きです。

ドッグランがあつたり、公園のしばふに着くともものすごいスピードで走りだしたり、しばふに体をこすりつける行動をします。これを見るとリリーが楽しんでる様子がつたわってきて私もうれしくなります。

たくさんうん動をした後は、公園のてっぺんで、海や船など、きれいなけしきを見ながら食べるアイスはさいこうです。この前は、ジュースを買ったら大当たりが出て、ますますこの公園が好きになりました。

そしてリリーをつれてさんぽをしていると、いろいろな人が声をかけてくれます。みんなとてもやさしい人たちです。

こんな山ちよう公園が私は大好きです。

〈講評〉

晴れた日にお母さんと愛犬リリーと楽しく遊んでいる様子が、鮮明に浮かぶ作文です。公園の魅力を紹介しつつ、そこでどんな風に過ごしているか、またどんな思いでいるのが詳しく書かれています。自分の気に入る場所を見つけることは、自分の住むまちを好きと思えることにもつながります。魅力あるまちをより好きと思えるために、晴れた日はぜひ外に出て、すてきな場所を探してみてはいかがでしょう。

小学生B部門

☆☆☆ 中区選挙管理委員会委員長賞（金賞） ☆☆☆

「今わたしたちに出来ること」

大鳥小学校 四年 佐々木 陽向



中区ができたのは昭和二年。わたしのひいおばあちゃんは、中区より一才年上の昭和元年生まれです。中区と同じ九十年間を生きてきたひいおばあちゃんに、子どものころの話を聞いてみました。

ひいおばあちゃんが生まれたころは、家にガスも電気も水道もなかったそうです。小さいころは、習字を書いたり、公園で写生をしたり、池のまわりでおどったりして遊んでいました。中学校に通うようになってから、家にガスや電気がきたそうです。でも、まだ車がないので、遠くの学校までガタガタの道を自転車を通っていました。女学校を卒業するころは、戦争で食べる物も着る物もあまりなくて、とても苦しかったと言っていました。三十才をすぎたころから、テレビ、洗たく機、冷ぞう庫、そして車などができました。今では、あたり前のように使っている物がなかったことにおどろいたし、大変だなあと思いました。わたしたちの生活は九十年間でとても便利になったのだなということが、わかりました。でも、ひいおばあちゃんは、あまり便利ではなかったのに、小さいころも楽しかったと言っていました。となり近所はみんな知り合いで、人とのつながりがとても深かったこと。でも今は、ひいおじいちゃんと二人ぐらしかから、さみしいと言っていました。

わたしは、これだと思いました。今のわたしたちの生活は、おじいちゃんとおばあちゃんとは別々にくらしている家が多くて、大家族でくらしている家が少なくなりました。ひいおばあちゃん達が子どもころにあつて、今にないもの、それは「人と人とのつながり」だと思いました。「人と人とのつながり」をふやしていけば、中区は今よりももっといいまちになると思っています。そのために、わたしたちに何が出来るだろうと考えてみました。

「人と人とのつながり」をふやすために、わたしたちができること、それは、声をかけ合うことだと思います。「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」「ごめんなさい」など声をかけ合うとみんながいい気持ちになり、笑顔になれると思います。笑顔になれば、おたがいに助け合うことができます。こまっっている人にやさしくすることもできるようになると思います。だから、声をかけ合うことはとても大切だと思います。

「人と人とのつながり」がふえれば、中区はきっといいまちになると思います。みなさんも、まずは自分の住んでいる家の近くの人から声をかけてみませんか。わたしも、たくさんの人に声をかけたいです。

〈講評〉

九十年前の中区はどんな町だったのか、ひいおばあちゃんと会話。微笑ましい光景が目につかぶようです。その会話からヒントをもらって、むかしあつて、べんりになった今なくなつてしまった事、「人と人とのつながり」それを取りもどすのには、声をかけ合う事だと気がついたところがすばらしい。声をかけることは勇気があることですが、まず身近から始め、しだいにそののを広げていけば、きっと笑顔と助け合いのある良い町が出来るとおもいますヨ。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「中区をより良い町にするために私がやる三つのこと」

間門小学校 四年 坂部 綾香

私は、この中区の町がとても好きです。そして、この町がより良くなるために私に出来ることは何か考えてみました。

まず一つ目は、「こまっている人を助けること」です。私は二年生の時、下校中に転んでしまったことがあります。その時、たまたま近くで見ていた人が「だいじょうぶ？」と声をかけてくれました。転んで不安だった私はとてもうれしかったのを今でもおぼえています。その人は、ケガをした所にばんそうこうもはってくれました。私も、こまっている人を見かけたら、声をかけてあげられるような人になりたいと思います。そうすれば、私も、そしてその時声をかけた人もみんな笑顔になって、より良い町になるのではないかと思うからです。

二つ目は「地いきの活動に参加すること」です。私のお母さんは、今年町内会の理事をやっています。そして、毎月一回防犯パトロールに参加しているので、私と弟もお母さんといっしょに近所をパトロールしています。その活動に参加している人たちは私たちだけではありません。最初は大人の人たちにまぎって参加することは、とてもきんちょうしました。でも、みんなとてもやさしくしてくれるので、今ではパトロールの日がとても楽しみです。その活動は町の安全にもつながっていくのではないかと思います。道にある外灯が切れていないか、人通りやミラーの位置をかくにんしたり、町内会のけいじ板にはり出してあるお知らせもかくにんします。テレビのニュースでは事けんや事こも多いです。私は自分が住んでいる町も安全でなければいけないと思います。みんなが安心して楽しく生活出来るように、私も防犯パトロールの活動をこれからもがんばっていききたいと思います。

そして三つ目は「あいさつをすること」です。防犯パトロールでいっしょにまわっている人に朝会ったことがあります。でもその人は私に気づいていなかったのですが、「おはようございます！」とあいさつをしました。その時の話を、お母さんはその人から聞いたようです。「元氣よくあいさつをしてくれてとても感動した」と話してくれたことを聞いて、私もすぐうれしかったです。自分からあいさつをすることはきんちょうします。でも、あいさつをすると、とてもすがすがしい気持ちになります。そして自分も相手の人も明るい気持ちになるのではないかと思います。これからも、きんちょうに負けないで自分からコミュニケーションを取っていきけるようにあいさつが出来たらいいなと思います。そして中区以外に住んでいる人が、中区に来た時に「この町に来て良かった」と思ってくれるように私も自分に出来る事を探してより良い町を作っていきたいです。

〈講評〉

一人一人の心がけがよりよい中区を作っていくことがよく分かる作品でした。例示されている自身の体験からは、まちの人との関わりによって成長していく様子が感じられます。けがをしたときに助けてくれた人、防犯パトロールの活動、あいさつを褒めてくれた人、そうした大人の姿から学び取ろうとする姿勢は、将来のよりよいまち作りにつながっていきます。「私がやる三つのこと」とあるように、自分自身の行動がまちを作っているのだと感じられる素晴らしい作品でした。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「スポーツでつながる」

北方小学校 六年 柘田 優凧

「朝、早く起きて練習しようよ。」

「お守りのストラップ作ってきたよ。」

「 टीーシャツもおそろいにしよう。」

そう、すべては勝利を手にするために。

私はスポーツを通して町の人々となることがよりよい町への第一歩だと考えます。

だから今年、私は友達にさそわれて駅伝に出場しました。その駅伝は四人一組のチームになってゴールを目指すものでした。チームにはあまり関わったことのない人もいました。けれど、駅伝をきっかけに話すことが増え、その人と仲良くなりました。スポーツは私たちにコミュニケーションのきっかけをあたえてくれます。

駅伝に参加する人はみな、一位を取るために練習してきました。もちろん、私たちも一位を取るために一生懸命練習してきました。結果は十五位。一位にはとどきませんでした。悔しいと強く感じたけれど、一位のチームに憎しみはなく、むしろ敬意がわいてきました。それは同じ駅伝という競技を通してきつさや楽しさを共感したからだと思います。

「走ることは世界を変えられる。」これはレバノンのマラソン走者だったメイ・エルカシルさんの言った言葉です。かの女は、内戦状態であればらだった国民の心をマラソンで一つにしたそうです。走ることにより、多くの人と関わります。そして同じ目標に向かって頑張ることだけが認められることができます。

中には、スポーツは勝ち負けがはつきりつくため、たがいを認めることはできないと考える人もいます。しかし、本当に大切なのは勝ち負けではなく、一人一人がその競技で努力したことを認められるかどうかです。

オリンピックは人種や宗教、国せき貧富を越えてさまざまな人が参加できる権利があります。これにより、すべての人の努力をスポーツを通して認めることができます。

このように、スポーツはたがいを認めることができ、たがいを尊重できるようになります。これがよい町へとつながっていくのです。私のように地域の大会やイベントに多くの人が参加すれば、よい町への道は、開かれると私は信じています。

〈講評〉

「まち」が指しているのは、そこに住む人であること。その一人一人が、お互いを尊重し合えることで「よりよいまち」をつくっていくという視点が素晴らしいです。勝敗が出る駅伝において、結果の優劣だけではなく、その日までに注いだ努力を認め合える気持ちの大切さがよく伝わりました。東京オリンピックを目前に控えて、そのような気持ちが広がっていくように、是非地域の大会やイベントにも参加してください。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「人と人とのつながり」

北方小学校 五年 成迫 颯

ぼくはより良いまちをつくるためには、人と人とのつながりが大切だと思います。人とのつながりを感じることにひとつに、地域のお祭りがあります。自分の住んでいる地域でも年に一回夏祭りが行われ、祭りにはたくさんの人が集まります。地域の人、学校の先生、友達、PTAの保護者など赤ちゃんからお年寄りまでいろいろの人が来ます。

お祭りが行われるためには、会場やお店の準備、たいこや盆踊りの練習などが必要です。これらの準備を通じて人と人とのつながりができていると思います。なぜかという準備をするには、話し合いや協力が欠かせないからです。協力というのは、人と人とのつながりができないとできないと思います。人が集まって協力してつくりあげるから、楽しいお祭りができていると思います。

ほかにぼくが人と人とのつながりを感じることは、少年野球です。ぼくは、少年野球のチームに入っています。野球を通じて中区のチームや横浜市内の他のチームとつながりをもつことがあります。少年野球の大会もお祭りと同じようにたくさんの人が関わっています。主さい者、しんぱんの方々、スタッフやボランティアの人たちがいてはじめて大会ができると思います。

ふだんの練習や練習試合も人と人とのつながりができませぬ。たたかってくる相手チームがいないと、試合もできませぬ。ぼくは野球のチームプレーで、人と人とのつながりがいかに大切か学びました。ボールをどこに投げるかの指示もチームワークがないとできません。声をかけ合えないとボールがとれません。なぜかという、仲が悪いとちがうところに投げたり、声をかけないとぶつかってしまったり、チーム全体の空気も悪くなってしまうからです。

ぼくは、より良いまちをつくるためにも、チームワークが大切ではないかと考えました。チームワークは、人と人とのつながりからうまれます。人のつながりがよくなると、おたがいに信らいできるようになります。ぼくの住むこのまちが、おたがいに信らいし合える明るいまちになってほしいと思います。

〈講評〉

文章全体を通して、様々な「つながり」について書かれていました。まちの人達の「つながり」があることで、たくさんの人達が楽しいと感じられていることが伝わります。お祭りや少年野球をするには、そのために尽力をしてくれている人達がいる、という視点が素晴らしいです。少年野球の経験から得た、どんな時でもチームワークが大切であるという考え方を、信頼し合える、明るいまちづくりにつなげていってほしいです。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「中区九十歳！あいさつとマナーで暮らそう」

北方小学校 六年 竹田 汐里

中区九十歳。これからもより良いまちをつくるために私たちができること。私はこのテーマを見た時地域の人たちとの関わりについておもしろいと思いました。地域の人たちと関わるというのは直接これからのより良いまちづくりに関わる大切なことだと思います。

地域の人も自分も笑顔になり、中区でくらすことが楽しいと思えるような生活。それがこれからのまちづくりが必要です。私はそこである自分の体験を思い出しました。ある日バスに乗り出かける時に、地域に住んでいるおじいさんに会いました。おじいさんは私に「今日は雨が降っていていやだね。」と話しかけてくれました。私は、「そうですね。」と答え「スポーツをしているの。」とか「夏休みはいいね。」などとバスをまわっている間楽しく会話をし、自然と笑顔になっていました。私は、この体験を通じて地域の人たちと会話をするのでより良いまちづくりができるのではないかと考えました。

しかし、地域の人たちとすぐに仲良くなり話すのはむずかしいしはずかしいなどと感じる人は少なくないと思います。私もたまたま楽しく話が盛り上がったのかもしれませんが、ですが、一人一人ができる地域の人との関わり合いもあります。それは、あいさつです。「おはようございます。」「こんにちは。」「こんばんは。」そのすぐく短いあいさつを一人一人が何日も続けることで信らい関係を地域でつくれるのではないのでしょうか。

中区は今、九十歳をむかえ次は、九十一歳と歳をとっていきます。中区に住んでいる人としてこれからも中区が成長できるように一人一人が大切なマナーを守ること大切だと思います。たとえば公共の乗り物に乗る時のマナー。公共の物を使う時などマナーをみんなが気をつければ、前に話したあいさつと同じように気持ちがいいです。中区は観光客の人たちがたくさん来る、日本の神奈川県横浜市の中区です。観光客の人たちも「すてきな町だな。」と感じてもらいたいこともより良いまちづくりに必要不可欠だと私は思います。

これまでに話してきた内容は中区の明るい未来のために必要な事です。私はとても中区が大好きなのでこれからも発展して行ってほしいとともに古き良き開港の歴史も守り、一つ一つ自分たちができる町づくりをしたいです。

〈講評〉

「地域の人も自分も笑顔になり、中区で暮らすことが楽しいと思えるような生活。」この一文には、中区の素晴らしい未来が詰まっているようで、心が惹かれました。そのきっかけとなったのは、地域のおじいさんとの些細な会話でした。おじいさんとのありふれたやり取りを通して、人と人が関わることの大切さにつながっていくところが素晴らしいです。あいさつやマナーを守るといった、当たり前前の行動が広がっていくために、まずは自分から行動してください。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「手と手をつないでびんご」

本町小学校 六年 矢野 詩織

私のクラスでは、横浜の学習、総合で中区野毛町のことを調べています。調べ学習では日々のつみかさねを大切にしながら活動しています。最終的な私達の目標は、自分達で開発したメニューを野毛の店に出してもらい、地域の方々を笑顔にすることです。そのために町めぐりに行き、「町のグッドポイント」を探してみることにしました。町めぐりではグループに分かれそれぞれの個性を生かした持ちようのあるお店をめぐることができました。町めぐりから帰ってきて、グループごとに話し合い、一番多く出た話は、「野毛の人達の良いところ」でした。いろんな質問に答えてくれたり、店の中を教えてくれたり、写真をとらせてくれたりしました。そこで私は、やっぱり町の活せいはこの町の人達の親しみやすさや他人に対して思いやりがあることなどから始まるのではないのか、と考えました。そういう人達がいるからこそ人がよりよってくる町なんだな、とも感じました。そのみ力をもっとみんなに知ってもらいたい、そう考えて起こしたのがこのプロジェクトでした。野毛の人達は学校の行事に来てくれたり、私たちの安全を見守ってくれる地域の人達の力になれるよう、私達もいろんな形で地域がより良くなるような活動をしたいです。

また、特別クラブなどでも中区の地域を活用させてもらったり、町のよび起こし活動に関わったりもしています。そんな中区の活動に取り組むということは、自分達も町づくりの参加に取り組んでいる、ということなんです。毎年、私が入っている邦楽クラブでは演劇会をやっています。その他にも、横浜にぎわい座のけいろう会でも演劇うしています。そのような活動をしたとき、会でアイスクリンを作っている方にとても親切にしてもらい、アイスクリンをいただいたことがありました。こもんの先生がえんりよして言った、「私達は出させてもらっている身だからいいのに…。」と言った言葉は今でも覚えていますが、うれしくてそのアイスクリンがいつも食べるよりもおいしかったことが心にきざまれています。

地域の人達の関わりや、町のみ力など活せい化につながることをこれからもがんばって活動していきたいです。

これからも広くみんなに地域を伝えられるような活動をしていきたいです。そのためにまずは、野毛の地域らしさのあふれるどんなメニューがさい用してもらえるか。思いめぐらせて自分自身がワクワクしているところです。

〈講評〉

作文の冒頭に、「私達の目標は、自分たちで開発したメニューを野毛の店に出してもらい、地域の方々を笑顔にすることです。」と述べられています。このインパクトのある書き出しには、作文の内容に引き込むような工夫がありました。野毛のまちの人達の魅力は、親しみやすさと他人に対しての思いやりと気付いてから、これまでの自分の経験を振り返り、そのまちの魅力を見直していく時の視点が素晴らしいです。まちの人達の笑顔のために、素敵なメニューを開発してください。

☆☆☆ 中区明るい選挙推進協議会会長賞（金賞）

☆☆☆



「選挙への一歩」

仲尾台中学校 二年 渡邊 滉太

七月のある蒸し暑い夕方に、部活帰りの僕は、地区センターの前に設けられた看板に気がついた。いつの間にか、今年の七月三十日の横浜市長選挙の立候補者のポスターが貼られている。選挙に立候補したのは三人だ。三回目の当選を目指す現職と、若手の新人が二人である。すこし前だったら、スルーしていたポスターを一通りみて、僕は家へ歩き出した。

二〇一六年（平成二十八年）に公職選挙法が改正され、それまでは満二十歳以上の人に認められていた選挙権が、満十八歳以上の人にも認められるようになった。僕は現在、十四歳なので、四年後には選挙権を得ることになる。

そのことにはっと気づいた僕は、四年後の僕を頭に思い浮かべてみた。大学受験に向けて、勉強をがんばっているのだろうか。それとも相変わらずゲームにはまって、ウロウロとしているのだろうか。このまま、漫然と過ごしていたらどうなるのだろうか。候補者をきちんと選ぶことができるようになった四年後の自分の姿が、まるで想像できなかった。

そうした不安を払拭するため、僕が選挙のたびに意識して行っていることがある。それは『自分だったら誰に投票するか』を考えることだ。

新聞やインターネットを通して、意識的に各候補者の情報を得ることはとても大切だ。その候補者の人柄や魅力を伝えてくれるのがどんな情報かは、実際に様々な情報を集めてみなければわからない。

自分以外の人からの意見も聞いておいた方がいいと思う。僕は選挙があるたびに、候補者について家族の誰かと話し合ったり、意見を聞いたりしている。

選挙について考えるようになる前は、公約をみて「あっ！この公約いい！」という考え方しかできなかったが、話し合うようになってからは、「この公約は果たしてどこまで実現可能なのか」など、様々な視点でポスターの内容をみるができるようになってきたと思う。

その分、以前よりも、選挙で一票を投じることは簡単ではないと感じるようになった。公約の内容をしっかりとみることでも大事だが、それが実行力を伴っているものかどうかは、もっと重要なのではないだろうか。そうだとすれば、『理想の公約』と候補者たちの『実行力』を、どうやって見極めていけばいいのだろうか。

結局、僕は横浜市長選の候補者の中から、「この人がいい！」という人を絞り込むことができないまま、七月三十日を迎えた。まだ一人を選べるところまではきていないが、選挙について考え始める前とは違い、選挙というものが身近に感じられるようになってきたと思う。これは、僕が選挙権を得る四年後への、大きな一歩ではないだろうか。

〈講評〉

18歳となる4年後の選挙権を得る時のことを意識し、今、自分だったら誰に投票するかを考え、様々なメディアの情報や、家族との意見交換、又、立候補者の公約やその実現の可否等、多角的な視点で判断するということは素晴らしいですね。そして選挙が身近に感じるようになったと云うことですが、是非、あなたの考え方、選挙の大切さを併せて周囲の友人にも広めて欲しいですね。期待しています。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「私たちがつくる町」

本牧中学校 二年 太田 更咲

九十周年を迎えた今、中区では投票率が下がってきています。その中でも、特に投票率が低いのは二十代の若い人たちで、このままでは選挙に行く人がどんどん減ってしまい、私たちの意見が反映されない、住みにくい町になってしまうと、私は思いません。では、選挙に行かないことは、どうして良くないのでしょうか。

私は、小学校の時にこの町に引越して来ました。引越す前の町は、子供の医療費が無料でしたが、小中学校にクーラーや暖房がついていませんでした。中区とは制度が違ってきます。その町の市議会議員の人は、そのような制度の政策を掲げていて、その議員は選挙で選ばれています。例えば、その町で子供の医療費は無料の方がいい、と思っていた人が、誰も選挙に行っていなかったとしたら、今の議員は選ばれず、子供の医療費はかかり続けていたかもしれません。つまり、選挙に行く人が少ないと、一部の人の意見しか町づくりに反映されなくなってしまうです。けれど、逆に投票に行く人が多いと、それだけたくさんの人たちの意見が取り入れられ、良い町づくりにつながります。

ではなぜ、投票率は下がってしまったのでしょうか。その原因は、選挙への関心が足りないことだと、私は思います。私の友人も、選挙で何が変わるのかわからない、選挙について考えたことがあまりないと言っていました。今の中区にはそんなふうにいる人が多いのだと思います。そんな中で町づくりにしての意見を持つて選挙に行こうと言われても、どうすればよいのかわかりません。自分の町について考える時間が足りていないのです。

横浜は海外からの観光客が多いので、ごみのない、治安のいいきれいな町にしたいと私は思っています。なので、そんな町を作るために、十八歳になったら選挙に行こうと思います。少しでも多くの若い人がこのように思えるようになるには、学校の授業などで自分の町について考える機会を増やすことが必要だと、私は考えます。みんながそれぞれに理想の町の姿を思い描き、そんな町をつくるためにできることを考えたととき、投票率は上がり、町は良い方向に発展していくと思います。あと十年で百周年を迎える中区。今よりもっと住みやすく、誇れる町となって百年目を迎えられるように、これからの未来を担う私たちが、自分の理想をもって生活していきたいです。そして、町を愛し、町づくりについて考えることが、これから作りあげる私たちの素晴らしい未来への第一歩だと、私は思います。

〈講評〉

20代の若者という自分たちからもっとも近い年代の投票率に着目し、そこから「なぜ選挙にいかなくてはならないのか」を無理なく考察しています。百周年を迎えようとする中区を自分たちで作り上げようとする気概。それこそが若者に求められていることです。海外からの観光客から医療費まで、大人が考えること、ではなく自分たちの問題としてとらえていく。「自分たちの町について考える時間が足りていない」とを知っていることが、すなわち考えているのです。素晴らしい着眼点です。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「落選が教えてくれたこと」

仲尾台中学校 三年 小林 千紗

選挙。それは十八歳未満の私たちには遠い存在だと思われがちだ。しかし実際そのようなことはない。私たち中学生でも有権者、立候補者になる機会がある。それは公職選挙のミニチュア版。未来の学校を担う役員を決める生徒会選挙だ。私は過去に二度、生徒会選挙に立候補したことがある。

昨年十二月のある日、普段と変わらない通学路が少し長く感じられた。肌をさすような冷たい風が私の心をざわざわと揺らして吹きぬけてゆく。震える手を抑えながら校門をくぐり、昇降口の張り紙を見上げた。私の名前の上には赤い花がついていた。これは、図書委員長に信任したことを示した。私はこの時、体の力が抜けていくのを感じた。

信任投票にも関わらず、私が選挙の結果を見るまでこんなに不安な気持ちに支配されたのには訳があった。

それは今から二年前の苦い思い出、一年生で二年副会長に立候補した時のことだ。私の他にもう一人同じ役職に立候補した男の子がいた。その男の子は人気者でムードメーカーだった。しかし私は諦めていなかった。応援演説をしてくれる友達と共に出来る限りのことをし、全力をつくした。が、結果は落選だった。

なぜ、落選してしまったのか。自分なりに考え、分析してみた。すると、演説に問題点があることが分かった。

一年生の時の演説では「明るく楽しい、笑顔のあふれる仲尾台中学校にしたい」といった抽象論ばかりをならべ、具体的にどのようなことをしていきたいかを伝えていなかったのだ。この反省を元に、二年生の時の演説では、「HRの時間で行われる朝読書で少しでも多くの人に楽しんでもらうために本棚に映画化された話題の本を置いていきたい」などと具体的な例をあげた。その結果、当選を果たしたのだ。理想のイメージだけをいくら並べたところで人の心には届かない。具体的にどのようなことを実行しようとしているのかが大切なのである。これが、私が二年間の落選から学んだことだ。

三年後、私は公職選挙の選挙権を持つことになる。私が落選から学んだことは公職選挙にもつながることだと思う。候補者の政党やイメージで選ぶのではなく、その人の掲げた政策に注目して選んでいきたい。

三年という月日はあっという間だ。身近な生徒会選挙に真剣に取り組み、公職選挙を迎えられるようにする。これが今、私たちにできることだ。

三年後、未来を決める選挙のために。

〈講評〉

まず「公職選挙のミニチュア版」という表現が目を引きました。それは単にミニチュア、つまり縮小という意味合いでなく、自分の身近な当事者としての意識だと思えます。「肌をさすような冷たい風」「私の心をざわざわと揺らす」という表現に筆者の卓越した国語力、表現力を感じますが、それ以上にライバルに対しての想いや落選したときの自己分析に当事者意識が感じられ、そこから公職選挙を中学生として無理なく考えているところがたいへん好感が持てました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「中区の将来の為に大切な選挙」

仲尾台中学校 一年 廣井 まなみ

最近、特に若い世代の選挙の投票率低下が問題視されています。区別で全体的にみると、中区は十八区中、残念ながら最下位でした。投票率は、約五十二パーセントで、ほぼ半分の人しか投票していないということです。現在でも、投票率がどんどん下がっているのです、このままでは、四十、三十パーセントともっと下がってしまいます。

投票をする事は、国民が政治に参加できる大切なチャンスです。ですが、投票率は下がってきています。なので、私はこの問題を解決するために、一つの方法を考えます。

選挙の日にちが近づくと、ニュースでも、「明日は選挙なので、皆さん投票に行きましよう。」などという言葉聞きます。しかし、それでも投票率は上がっていません。なので、私は一人、一人に呼びかけをする事が大切だと考えます。ニュースなどは、皆が観れるものなので、自分に言っていると感じない人が多いと思います。そして、特に若い人は政治の事をよく知らない人も多いと思います。なので、私は駅前などの、町中で投票を呼びかけるチラシを配ることが効果的だと思います。そして、そのチラシを配られた側も、自分に言っていると感じる事ができます。そのチラシには、なんの為に選挙を行うのかや、選挙の仕組みを書く事で、皆が選挙を行う必要性が、くわしく分かると思います。

さらに約一年前に公職選挙法が改正され、選挙権年齢が十八歳以上に引き下げられました。私たち、中学生はあと約三年から六年で選挙権を得る事ができます。まだ先だから自分に関係ない、と思わずに、まだ先だけど、選挙について知り、選挙権を得たときに、なんの為に投票するのかを考えた上で投票したいです。

十年後の中区の将来の為に、投票をする事は、とても大切です。選挙で中区の、皆の暮らしが変わります。自分の為だけに、選挙に行くものではありません。中区に住んでいる皆の為に、行くのです。選挙は、自分の意見を今の街づくりに反映できる、大きなチャンスです。私も、選挙権を得たら、中区の未来、自分たちよりも若い世代の為に投票に行きたいです。これからの選挙で、中区で選挙権を得ている人、皆が投票し、中区民全員の意見が反映する、選挙を目指したいです。

〈講評〉

投票率に着目し、具体的なデータを明示することで分かりやすく提示していると思います。その上で、自分の考えがもっと深められているとより良かったと思います。「自分たちよりも若い世代のために」の一言は素晴らしいですね。大人として、考えさせられました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「選挙と向きあつて」

大島中学校 三年 川島 凜佳

私は中区民はもつと選挙に行くべきだと思えます。とあるデータによると、中区の投票率は非常に低く約五割の人しか選挙に行つて投票していません。五割つまり中区民の選挙権をもつ人半分しか選挙に行つていません。半分の人の意見で、決まつてしまふのはもつたいたいないと考えます。十八歳以上の人全員に権利があるのにもかかわらずその権利をむだにしまふのはどうなのかなと思います。昔は、選挙権をもてることがめずらしかったです。選挙権をもつことができたのは、財力が大きい人や貴族ばかりでかたよつた考えでした。貧しい農民たちの意見はなかなか通らなかつた時代もありました。しかし、現在は違います。現在は貧富の差関係なく一人に一票選挙権が与えられているので自分の意見や考えをもつていてる政党に投票して自分の住んでいる地区、地域をより発展するようにしたいです。

今の私は中学生だから選挙権をもつことができません。しかし、今からでも国の政治や国会のしくみについて理解することはできます。公民の授業で学ぶのはもちろんですが、今ある政党の持ちようなどを知ることができすし、選挙期間中に町に出て演説をきくことも政治について知れる良い機会だと思います。もし、三年後私が選挙権をもつことができたなら、私は投票したいと思えます。自分の一票で未来がすぐかわるわけではないけれど、自分の意見や考えは伝えたいし、届けたいからです。色々な政党の政策や、モットーとしていふことなどを批評してちゃんと政治と向きあつて投票したいです。

「選挙」が行われるためには代表として出馬している人がいます。その人たちは、プライドをもつて戦っています。私は生徒会選挙にでて当選したことがあります。当選するために、ポスターをかいいたり、たすきを作つたり演説用の原こうを作つたりとたくさん準備が必要でした。時には放課後の時間だけではたりず、休日に集まつて作成しました。当選した時はうれしかったです。でも、区長や市長などを決める時はほとんどの人が役職につくことができません。だから、絶対なるという強い意志と覚悟をもつて出馬しています。その人たちが命がけででている選挙に行つて投票することとはあたり前といつても過言ではないと考えます。中途半端な気持ちでは、出馬する側も、投票する側も選挙をすることはできません。

この国は選挙があることで国民の意見が反映されています。私のような考えをもつ人が増えれば、十年後、選挙に行く人の数は増えると思います。そして、まわりの人に伝えていきたいです。

〈講評〉

「自分の一票で未来がすぐかわるわけではないけれど、自分の考えは伝えたい」これは選挙というシステムの根幹かもしれませぬ。「蟻の一穴、磐まで通す」という格言があります。あなたのように考えてくれる人が増えていけば、必ずや未来は良い方向に変わっていきます。「中途半端な気持ちでは、出馬側も投票側も選挙をすることができない」これは我々大人が金科玉条にせねばならないことです。中学生の筆者に教えられます。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「気持ちでかわる一票の重み」

本牧中学校 三年 廣田 伶

私の家のポストに一通の封筒が入っていました。今年七月に行われた、横浜市長選の案内で、十九歳の姉に届いたものでした。選挙権が十八歳に引き下げられ、私もあと三年後には選挙権があるのだなど、とても楽しみな気持ちでいました。

そんな気持ちが一変したのは、午後6時現在の投票率のニュースを見たときです。「二十二・五パーセント」それでも前回よりは四・二四ポイント高いということ。私はとても少ないなと思いきまりました。横浜市トップを決める選挙だというものに、あまりに無関心なのではないかと思いました。私は、この夏休みに税金について学びました。私たちが安心して、健康な生活を送るのにとっても大切なものです。市の予算や条例を定めるのに、とても重要な役割を果たす市長選なのだから、選挙権がある人には、それぞれの候補者の政策を比較し、より横浜に求められる人を、市長として選んで欲しいと思います。今回の横浜市長選の最終の投票率は「三十七・二一パーセント」でした。それでも少なく感じます。

横浜市のホームページに「選挙権がなくてもできること！」という欄を見つけました。そこには、選挙権を持ったとき、しっかりと自分の意見を言えるように今から勉強しておこう。とあり、具体的に次のようなことが書いてありました。「新聞やテレビのニュースを見て関心を持ったことは、図書館やインターネットで、さらに調べてみる。」「地域のために活動しているボランティアに参加する。」などです。よく見てみると、特別なことではなく、普段私たちがやっていることが、将来の選挙へとつながっていくのです。

私たちが住む、横浜市中区は今年区制90周年を迎えます。中区は開港とともに始まる、横浜の歴史と文化を背景とし、発展し続けてきました。10年後には100周年という、大きな節目の年を迎えます。10年後、国際色豊かな横浜の魅力を守り続けることができているだろうか。更なる横浜の魅力を引き出すことができているだろうか。

選挙権が得られる年齢になるまでに、たくさん学び、責任を持って自分の意見を述べ、一票を投じられるような人に、私はなりたいです。

〈講評〉

19歳のお姉さんに届いた市長選の投票券によって、自らの選挙権取得があと三年後に迫ったことを知ってわくわくする。しかしその気持ちだが、投票率のあまりの低さに一変してしまう。リアルな中学生の感情が伝わってきて、とても好感が持てました。横浜市のHPから「選挙権がなくてもできること」を見つけ、逆説的に選挙権があれば何ができるかを知る。未来への興味と期待が伝わる文章です。

審査をふりかえって

全体を通じて、大きな喜ぶべき点は、多くの筆者、とくに小学生のみなさんが中区に対して、多大な愛着を持った「私たちの街」と捉えて文章を展開してくれたことです。健全な地元感覚とも呼ぶべき、お祭りや近所のおばさんやおじさんとのふれあい。そこに「明るい選挙」の原初があるのではないのでしょうか。

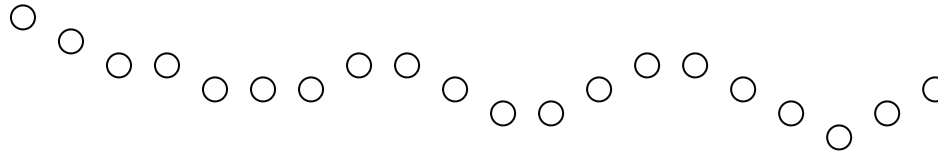
また中学生においては、選挙が遠い出来事、大人のやることで自分には関係ない、というありがちな考え方ではなく、当事者としての視点をもった作文が多いことがたいへん喜ばしいことだと感じました。これはもちろん、法律の改正によって選挙権が18歳に引き下げられたことで、子どもたちにとって選挙が身近なものとなったことが第一の要因だということは自明の理です。遠い未来の出来事ではなく、今、身近にある考えなければいけないこと、行動しなくてはいけないこととして選挙がある。過去の子どもたち、そう、即ち大人とは違い、健全で良質な当事者意識を持った最初の若者が、今回の筆者たち、あなたがたであるのかもしれない。未知の物事に挑もうとするとき、単純な期待と不安だけでなく、「どうすればいいのだろう」という疑問が壁となって立ちはだかります。しかしそれが、健全なフロンティア・スピリッツであり、まだ見ぬ壁に向かう気概と成り得るのです。しかも今回、筆者たちが、未来について考える第一人者である中学生である。これは選挙という民主的なシステムを推進するためのエネルギーであることは疑いないことです。

皆さんがいま自分たちのまちや選挙について多方面から着目し、一生懸命考えたことは、これからの中区、いや横浜市、ひいては日本の大きな財産になることは間違いありません。皆さんの前向きな明るいパワーを有意義に生かすべく、我々大人も頑張らねばならないと痛感させられました。今回の作文を執筆したすべての皆さんに大きな拍手と称賛を贈らせていただきます。「この先の未来」に向けて、ともに力を合わせていきましょう。



■作品の選考・講評■

横浜市立本町小学校教諭	赤岡 鉄矢
横浜市立北方小学校教諭	菊地 伸行
横浜市立港中学校教諭	國分 英幸
横浜市立港中学校教諭	小堀 真由美
横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	前川 友三
横浜市中区選挙管理委員会委員長	佐藤 綾夫
横浜市中区長	竹前 大



第37回

中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集

平成30年2月発行

発行

中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所

〒231-0021

横浜市中区日本大通35番地

TEL 045-224-8118

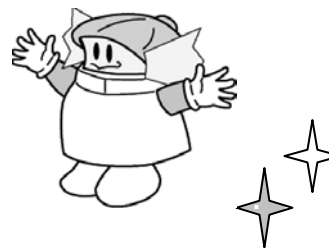
FAX 045-224-8109



あか せんきよ
明るい選挙キャラクター
せんきよ
選挙のめいすいくん



よこはましなか
横浜市中区のマスコット
スウィンギー



よこはましせんきよ
横浜市選挙のマスコット
イコットJr.